

The rudiments of transubstantiation (stage 2)

- 「生井利幸先生が、『自己の命の長心』を削って教授する」という行為に内在する真実 (文書教材)
- The disciples are blessed to study various components which rationally compose the whole of Toshiyuki Namai's language elevated as a common language of humankind (英語音声講義)
- Toshiyuki Namai shortens his life in order to exercise his holy instruction I. II. (英語音声講義)

提出日 2016. 3. 19

英語道弟子課程弟子. H. K.

英会話道場イングリッシュヒルズ
英語道弟子課程

生井利幸

「生井利幸が、『自己の命の長さ』を削って教授する」

という行為に内在する真実

[Preamble]

You disciples are holily blessed to study so many components which rationally compose the whole of Toshiyuki Namai's language elevated.

エラベイトしている生井利幸先生の言語全体を。

理性的に構成する

No explanation is necessary to say that his language is spoken at the risk of his short life anytime anywhere here on the earth in the solar system in the universe created by God.

神によって創られた宇宙における太陽系に存する地球において、生井先生の言語は、どこにいてもいつでも命を削って話をするのはもう説明の要らないこと。

It is true that what you receive from his spirituality seriously shortens his life.

Moreover, what you receive from his rationality critically shortens his life as well.

あなたの受け取ることは、すべて生井先生の精神性から派生しており、本当に短い生から来ている。さらに、短い生の中における理性性からも受け取っているのだ。

You have totally different quality and direction of the study in order to pursue the essence and the absolute truth under the aegis of holy instruction given by Toshiyuki Namai who risks his honor, dignity and life.

そうすることにより、生井先生が自身の名誉、尊厳、命を削って行う神聖な教授のもとで、本質と真理を探究する学習がまるっきり違うものとなる。

All you need is that you just follow his holy instruction and build your authentic culture universally through his transubstantiation rationally and holily conducted by him.

あなたに求められていることは、とにかく、先生の神聖な教授にひたすらついていくこと。

先生が指導する神聖な理性性の全質変化を経て、あなたの教養1が備わっていく。

弟子

削られている

序文

弟子は祝福されている

先生の要素を免れ強めること

生井先生の精神性、理性性

弟子の受け取り

命を削って受け取っている

・・・本文・・・

何十年の失敗・苦勞を
積み重ねて、80才を過ぎてから
得る境地

1 収斂に収斂を重ねて作り出した、「本質・絶対的真理への道のりを稽古する学問の聖域」

わたくし生井利幸が自己の命・名誉・尊厳を危険にさらし、一般社会に対して様々な啓蒙活動を行っている「生井利幸事務所」（生井利幸が行うすべての啓蒙活動の本体）は、事務所における国際教育部門として、英会話道場イングリッシュヒルズを介して国際教育を行っています。

英会話道場イングリッシュヒルズは、わたくし生井利幸自身が、法律家（比較法学、英米法、医事法、憲法学）としての国内外における実務経験、長年におけるアメリカ北東部の大学における教授経験、そして、海外・日本において数多くの講演・講義を行ってきた経験から導き出した、「生井利幸における究極的な『収斂』(astringency)と言える、『本質』のみを教授する、世界で唯一無二の学問の聖域」です。

先生の年でこの境地を得るには無理！！

当・英会話道場イングリッシュヒルズには、実に多様なコースが置かれています。そうした中、生井利幸は、「唯一無二の、極めて特別、且つ、極めて特殊な学問の巨大空間」を創設。その唯一無二の学問の巨大空間とは、言うまでもなく英語道弟子課程です。

先生の命そのもの

英語道弟子課程は、まさに、1)「生井利幸の“弟子”として探究する『学問の道』」、そして、2)「学問の道における『収斂の中の“まさに収斂”』(the “very astringency” of astringency in the studies transcendently)」と言える、最高峰の理性的、且つ、神聖な学問の聖域です。

学問の道
収斂

英語道弟子課程は、表現を換えるならば、「正真正銘の本物を生むための厳格道、且つ、学問所」です。このことを「・・道」と呼ばれる『他の修練の道』に譬えれば、茶道・華道・柔道・剣道などを挙げる事ができるでしょう。

経済はたけ、一生学ばぬ道、追求を続ける

言うまでもなく、「・・道」と呼ばれる修練の道には“終わり”はありません。例えば、茶道の道を志した者が、「僅か 10 年」で茶道のすべてを習得することは不可能です。茶の湯の道を歩む者が、例えば、「20 年」「30 年」という期間にわたって修練に修練を重ねても、「茶の湯の道においては、まだまだ“若輩者”である」、「まだ、果てしない茶の湯の道の入口付近をさ迷っているだけのことである」という捉え方は、所謂、通常の捉え方です。

否、それどころか、茶の湯の道においては、「50年」、「60年」以上の修練の道を経験し、実際にその道を教授する茶道家でも、「自分は、“まだまだ”である」、「茶会を開くとき、常に“これが最後の茶室だ”と自分に言い聞かせて『最高の美』への到達を試みるが、くった茶室には“無駄”ばかりが目立つ」と捉えるものです。つまり、「・・・道」という“道”の世界」には、その学びの道に『終わり』(the end)はないのです。

普遍的な立ち位置から述べるならば、本質・絶対的真理を探究するその道に『終わり』を定める学習者は、「『学びにおける限界』を自分から定める学習者」です。

→ 真の学びの道には 終わりが無いから。

学びにおける限界を自分から定める学習者は、「『自己の成長・発展の限界』を自ら定める」という、極めてネガティブ、且つ、ローカルな考え方の持ち主です。このことについて、「生井利幸の命の化身」である「英語道弟子課程の精神(spirit)と哲学(philosophy)」を源泉として述べるならば、僅か数年で学びの道の終わりを迎える弟子は、真の意味での弟子ではなく、「形だけの、単なる(一時的)受講生」と同じであると言わざるを得ません。

弟子は、今ここで、もう一度、「安易な眠り」、「偏狭、且つ、お粗末な価値観・捉え方」から目を覚まし、「生井利幸における『時間の神聖性』」について深い思索を試みてください。

→ どういうことか。命。賦与された命

1) 「弟子になれば、勉強における『近道』(shortcut)を教えてもらえる」、2) 「形だけ弟子になって一時的に英語道弟子課程を活用し、必要な能力を養ったら、もう用はない」という如き自己中心的考え方で学ぶ弟子(弟子選考試験受験者)は、一秒でも早く、そのような「不道徳」、且つ、「不誠実」極まりない毒された考え方を深く反省してください。そして、一秒でも早く、一個の人間存在として、「自己自身のあり方」、及び、「学問との向き合い方」を改善・更生してください。

損得で受けるものではない。
常に謙虚が必要。

生井利幸の弟子は、静寂の中に身をおき、再び、以下に述べる生井利幸の教訓について哲学してください。

- 1) 「安易な近道は、結局、『遠回り』である。」
- 2) 「悪銭身につかず。」
(己の利己心の下、「不正・不道徳な方法」で得たものは、やがて消えてなくなる。)

2 生井利幸とリヒャルト・シュトラウス

英語道弟子課程における学びの道において、生井利幸が作成した独自教材、「リヒャルト・シュトラウス作曲：『ツァラトウストラかく語りき』を介して体験具現する生井利幸の美意識の transubstantiation」(正式タイトル：The Subtilization of a Sense of Beauty through Listening to “Also sprach Zarathustra” Composed by Richard Strauss)の学習経験は、極めて重要な学びの一つであると、今ここで宣言します。

この文書教材には、まず最初に、“the first stage”として「ツァラトウストラかく語りき」を10回聴き、その後、“the second stage”として、教材に書かれてある24の事項について、「極めて繊細に想像し、感じ、思索しながら」この交響詩を40回聴く」という旨の指導内容が書かれています。

本稿において種明しをすると、実際のところ、リヒャルト・シュトラウスが作曲した「ツァラトウストラかく語りき」という本質的メッセージを包含する世界最高峰レベルの芸術作品について、「凡人」が、10回と40回、即ち「計50回」程度の回数を聴いたぐらいでは、“実にお話にならないほど”鑑賞経験が不足しています。

重要ポイントを先に述べるならば、教材に書かれてある“the first stage”においては「計300回」、”the second stage”においては、実に『10,000回(1万回)』を超えるほど、心だけでなく、「魂」(soul)で聴いて聴いて聴き込まない限り、「生井利幸の美意識における transubstantiation 具現」は到底不可能です。

もちろん、「作品の鑑賞回数」と「鑑賞の質」の二者は、常に比例するわけではありません。しかし、「最低でも、10,000回(1万回)は聴き込む決意・覚悟で、この作品と向き合う」という鑑賞経験は、生井利幸の厳格指導の下、「世界レベルの美意識」構築を具現する上で最低限必要です。

このことをわかりやすく述べるならば、「リヒャルト・シュトラウス作曲：『ツァラトウストラかく語りき』を介した生井利幸の美意識における transubstantiation」は、英語道弟子課程において、まさに「弟子自身における“a lifelong mission”(一生涯を介して取り組む使命)」として行うべき『巨大』学習プロジェクト』と言える学習経験ということです。

3 「弟子自身の行動そのもの」が「本物か、それとも、偽者か」を証明する

わたくし生井利幸は、「自己の命」、「個人としての名誉・尊厳」を危険にさらして、弟子に対して「命」(life)をはって直接指導しています。本稿を精読する弟子は、今再び、英語道弟子課程とは、1)「“形だけ”の学校なのか」、それとも、2)「正真正銘の本物を輩出する『**・道**』」なのか、「理屈」として頭の中で考えるだけでなく、「腹の『底』」から哲学してください。



何よりも重要なことですので、もう一度述べます。生井利幸は、日々、自己の「命」(life)をはって、完全個人稽古として弟子に直接指導しています。命をはれない弟子は、「命をはって指導している生井利幸の（限られた）時間」を無駄にしないことを切望します。

また、同時に、命をはって英語道弟子課程における学問の道を歩めない弟子は、「自分自身の（限られた）時間」を無駄にすることになります。生井利幸自身、「弟子の（限られた）時間」を無駄にすることを望みません。それ故、命をはれない弟子は、「一秒でも早く」、「命をはれない旨」を生井利幸に伝え、「一秒でも早く」方向転換を図ってください。「生井利幸の精神・哲学」の下で命をはれないが、これからも生井利幸の指導・助言の下で学びの道を歩み続けたいという弟子は、英会話道場イングリッシュヒルズの通常コースの受講生として学び続けることをお勧めします。

4 弟子における「英語道弟子課程に対する捉え方」

英語道弟子課程は、所謂、「**・道**」と同じように、「一生涯をかけて探究する学問の道」です。しかし、英語道弟子課程は、あくまで、公平無私な学問の精神に基づき、「普遍的な立ち位置から、『本質』、及び、『絶対的真理』を探究する」ことを「永久目的」とする究極的な学問の道です。

例えば、茶道も、一生涯を通して歩む精進・鍛錬の道ではあります。しかし、茶道は、あくまで“日本文化の一形態”です。茶道は、言うまでもなく、日本文化という“枠組み”の中でその精進・鍛錬の道を歩む道です。

一方、英語道弟子課程は、日本文化の一部門としての精進・鍛錬の道という如き「ローカルな範囲内における道」ではありません。英語道弟子課程は、天文学（学問として捉える宇宙空間）の立ち位置から、その広大な宇宙空間の存在を大前提として、「太陽系の惑星の一つである地球」(the earth in the solar system in the universe)の歴史を踏まえ、人類の

英知の探究として、学問・文化・芸術の稽古を行う「宇宙規模、及び、地球規模の学問の道」です。

生井利幸は、世界における諸々の文化・芸術に対して最大限の敬意を払っています。例えば、生井利幸は、どのような文化圏の習い事にも最大限、且つ、最高の敬意を払っていますが、生井利幸の弟子においては、そのような生井利幸の捉え方について“(安易に) そっくりそのまま捉え”、< 1 > 「英語道弟子課程における『神聖なる学問の道』」と、< 2 > 「特定の文化圏における習い事」に対してそれぞれ同等の扱いをすることは、「妥当性を欠如した、非理性的な捉え方」であることをしっかりと認識・理解する必要があります。

弟子は、英語道弟子課程は、特定の文化圏という、所謂、「狭い範疇の中で稽古を行うローカルな修練・鍛錬の道ではない」ということを“身を挺して”認識・理解し、その認識・理解したことについて生井利幸の弟子として“肝に銘じてください”。

このことがわからない弟子は、そうした不認識・不理解は、『弟子の目線・能力』に合わせて、少しずつ、且つ、わかりやすく完全個人稽古を行っている生井利幸の寛容・愛情・優しさに対して『無礼』(insult)を行う行為である」ということをしっかりと理解してください。このことについて理解できない弟子は、遅かれ早かれ、弟子としての勉強のそのプロセスにおいて「ある種の限界」を見ることとなります。

5 Toshiyuki Namai shortens his life in order to exercise his holy instruction.

<1>

The course for disciples, Eigodo was founded on the spirituality and philosophy Toshiyuki Namai possesses through philosophizing a sense of criticality in the whole of his academic life.

Scientifically, I haven't possessed any limited locality in the whole of my scientific life. I Toshiyuki Namai have no consciousness of speaking Anglo-Saxon American language at all.

Quintessentially, I am using a “common language of humankind” as a human being dwelling here on the earth in the solar system supernaturally given by God. This is the embodiment of my spirituality and rationality as well.

住まう
存する

Frankly speaking, what I speak in the presence of you disciples derives from my spirituality. And what I lecture upon derives from my rationality, too.

Hence, it is absolutely futile attempt to shallowly imitate how I pronounce this language. Imitating just pronunciation spoken by me doesn't work well and it is not effective for you disciples in your studies at all.

In addition, it is not an authentic direction to develop what you have in your "tentative culture" right now. The shallowness in your study experience really doesn't give you anything.

<2>

Toshiyuki Namai's disciples are blessed to study so many components which rationally compose the whole of his language. His language is spoken at the risk of his life anytime anywhere here on this planet.

As you surely grasped the following fact, what you receive from his spirituality seriously shortens his life. And also, what you receive from his rationality critically shortens his life. Because all of them are absolutely given from his life limited.

You disciples are truly required to grasp this fact. If you don't grasp this fact, it is impossible to know and understand the value of holy instruction Toshiyuki Namai exercises reasonably.

On the other hand, you disciples really need to recognize and understand that you really need to risk your life in a process to receive his holy instruction. If you risk your life to study various matters scientifically, culturally and artistically under his holy instruction, you surely have your possibility to dramatically improve what you have in your immature culture for the sake of the realization of building "authentic culture" by inches.

I Toshiyuki Namai hereby tell you that if you take action in accordance with my instruction given, ultimately, you make sense as my authentic disciple. I really hope that you are successful in studying various matters as "your lifelong mission" for the rest of your life given by God.

You pledged to follow all of my teaching through transubstantiation in the presence of my honor, dignity and life. I deeply hope that you will prove what you pledged by action you take. I'd like you to live in my spirituality and rationality as my disciple (ad infinitum).

誓約した。
↓
行言語無限に

生井先生の名譽、尊厳、命の面前で
↓
あなたには私の教授についていくと誓った。

誓ったことを行動で証明して下さい。

永久に、生井先生の弟子として
先生の精神性と理性性の
中で生きて下さい。

6 二重の「世界最高峰の学びの機会」

本稿において詳細に述べた如く、英語道弟子課程は、名実ともに、「世界レベルの英知・美意識」構築を目指す『世界最高峰の学問の聖域』です。ここまで精読を進めた弟子（弟子専攻試験受験者）は、最後に、以下の事項について、常識・良識のある一人の大人として良く考えてみてください。

< 1 >

（世間一般における）通常の場合は、教授者よりも先に、学習者側（学ぼうとする側）から、「命をかけて受験勉強して、どうしてもこの学校の入学試験に合格したい」、「一生をかけて、命をはってこの勉強をしていきたい」、「命をはって先生の指導についていきたい」という如く、通常、このような希望・願望・志は「学ぶ側」から表明されるのが普通である。

< 2 >

英語道弟子課程の場合、教授者である生井利幸自ら、即ち、学習者が命をはる決意をする前から、“公言”（公に堂々と述べる行為）として、「命をはって教授する」と宣言している。常識・良識ある大人であれば、この事実は、「世間一般ではあり得ない稀有（けう）な事実」、そして、「極めて稀、且つ、この上ない至上の学びの機会」であることがわかる。

< 3 >

このように、< 1 > 「世界最高峰の教授者の下で学べる」という事実だけで、この上ない至上の機会である。そして、それに加え、< 2 > 「教授者本人が、最初から、命をはって、学習者と真正面から向き合ってくれる」という事実が英語道弟子課程に存在する。このような様相について冷静に判断すると、これら2つの条件は、まさに、『世界最高峰の学びの機会』である。

・・・最後に・・・

英語道弟子課程で学ぶ弟子は、前述の「二重の『世界最高峰の学びの機会』」について、しっかりと「自己の『腹』」で哲学してください。この、世界最高峰の機会が同時に2つ提供されるという他の事実は、日本にも海外にもあり得ません。

弟子の勉強の姿勢において、一方的に、「講師が命をはってくれるから、私も命をはる」という“自己中心的な考え方”で勉強を進めていくと、将来のいつの日か、「勉強の方向性・質」に限界を見ます。また同時に、「自分は、生井利幸に命をはってもらうに相応(ふさわ)しい学習者なのだろうか」ということについても、常に、深い思索を試みる必要があります。

自ら
はるべき
だから

先生が一番いいのは、
と見たら

命をはって教授することを人生におけるミッションとする「生井利幸の、真正、且つ、神聖なる教授」に対して、弟子はどのような姿勢で向き合うべきなのでしょう。弟子は、本稿を何度も精読し、その後、たっぷりと時間をかけてノート作りを行い、このことについてしっかりと思索・哲学することが必要不可欠です。